
もう一回 2

本chan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一回 2

【Nコード】

N1108J

【作者名】

本chan

【あらすじ】

連作短編の続き。若干短めですが、ご容赦。

同年代の友達との楽しい日々。

しかし、どんなに楽しくても終わりは来るもの。

今日は保育園最後の日。

本の少しの寂しさを感じつつ卒園の日を迎えます。

もう一回 2

入園手続きから2日後。

僕は母さんと共に保育園に来ていた。

母さんは保育士の一人と話し始めているが、あまり興味はない。

僕の方は今日からは正式にこの保育園に通う事と先日の子達との約束もあつてか、常の自分と比べると幾分かテンションが上がっていた。

だが、先日の子達はまだ来ていない様で見当たらない、その内来るだろうと思うが少々残念だ。

そうしてあちこち見ている内に母さん達は話を終えたのだろうか、話しかけてきた。

「ゆーちゃん、お母さんはもうお仕事に行くけどお友達とは仲良くね。怪我しないように遊ぶのよ。」

「うん、母さんもお仕事を付けてね。」

指を立てながらメツと言う母さんは本当に三十路近いのかと思う程に幼さを感じてしまうが、話をややこしくする必要も無いので素直に頷いておく。

こちらを気にしつつも仕事に行く母さんを見送ってから、僕は今日の予定を考える。

遊具が置いてある保育園の庭に関しては先日の色鬼で既に探検は終了している。

となれば、まだ行っていない場所は裏庭と建物内の二つだが……建物の中はその内で良いとして、今日の所は裏庭に行ってみるか。

建物を回り込んで入った裏庭は、日陰特有のじめじめした空気とカビた匂いの漂う場所だった。

歩を進めれば、所々に花壇があり、花や木が植えてあるのが解るが、季節柄かそれとも日照不足からか、葉は付いていても蕾や花が咲いている植物は無く、苔と雑草に覆われた地面ばかりが続いている。

それを除けば、建物から突き出るボイラーやクーラーの室外機がある位で人気も全く感じられない。

それでも歩く度に足裏に返ってくる苔のふんわりした感触が気に入った僕は小さな裏庭を隅々まで歩き回っていく。

ギュッ、ギュッという音が出そうなまで厚い苔は実に踏み心地が良く、我を忘れて歩き回っていた。

そして表の方から子供特有の甲高い歓声が聞こえる様になって、僕は漸くハッと我に帰った。

詳しくは解らないが、太陽の傾き具合からもう10時にはなっていないそうだった。

多少の焦りを抱えながら慌てて表の庭に戻ると、既に多数の園児達が思い思いの方法で遊び回っていた。

これなら先日の3人とも直ぐに会えるだろうと思い、目を凝らしている……いた。

先日の3人の中で唯一の男子だった子がちょうど園内に入ってきた所だった。

「おはよう、また会ったね！」 「おはよう、他の子はまだなんだ？」

近づいてみると初日よりも随分と明るい声で先に挨拶をされた。元気なようで安心だが、前回と比べると随分と明る過ぎる気がする。

「嬉しそうだけど何かあったの？」 「うん！あのね……」

建物に荷物を置きに向かいながら話を聞いてみた所、先日の色鬼

を3人だけでしていたら他の子達も混ざっていき、かなりの大人数で遊ぶことが出来たのだと。

今までそんな大人数で遊んだ事は無く、また、ボール取りに行かせられる事も無くなったので（周りの子が「邪魔すんな」、「自分でやれ」と言っただけで庇ってくれたらしい）、皆で楽しく遊べるのが嬉しい、との事だった。

まあ、人生で初めて大人数で遊んだのならこれ位は喜ぶか。

「前に一緒にいた女の子はどうしたの？まだ来てないの？」

「うん、2人ともいつも僕より少し遅く来るんだ。」

「ふーん、じゃあ他の子を誘って遊ばない？」

「あ、やりたいやりたい。この前やった色鬼で良いよね？」

「うん、じゃああっちの子達誘ってみようか？」

僕が指差したのは今しがた建物から出て来たばかりの4人の子達だ。

何をして遊ぶかと相談している様なので、今言えばちゃんと混ぜてくれるだろう。

「ねえねえ、ちょっと良い？」

「ん、何だー？」

リーダー格らしき体の大きい男の子に話し掛けてみると、特に悪ガキとでは無いという様子だ。

「僕達も混ぜてほしいんだけど、良い？」

「どうするー？」 「おっけー」 「大丈夫ー」 「でもそっち

の子見ない子だよ？」 「いいっていいって」 「じゃあ決まりー」

結構すんなりと決まった、次は何をして遊ぶかだが…。

「じゃあさ、皆で色鬼しない？昨日していた奴。」

「昨日の？」 「オレさんせー」 「昨日もやったじゃん」 「

やるやるー」

結果、賛成2、反対1、中立1により色鬼に決定しました。

「次の色は―…、赤――！」

途端、ワツとさっきまで手を付いていたジャングルジムから一斉に赤い滑り台に逃げて行く子供達、合計11人。

あの後、遊んでいる内に、次々と他の子達が混ざり、僕も合わせれば13人、鬼も3人に増えた。

「待て待て――！」

歓声を上げながら逃げていく子達を後ろから追いかけていく。

その子達の中には先日の3人も混ざっていて、楽しそうにはしゃいでいる。

途中参加の彼女達だが、全く違和感なく楽しんでいる様だった。僕自身も何度か捕まったり捕まえたりと楽しく遊ぶ事が出来た。

そうやって我を忘れて遊んでいる時、唐突にお昼のチャイムが鳴った。

途端、今度は庭にいる全員が建物の一番広い部屋に向かって突撃を開始した。

50人近い子達、その全員が空腹を満たそうとして一点に殺到していくのは中々の迫力があつた。

僕自身は目を白黒させていたのだが、先日の男の子が手を引っ張って建物、その中の食事が用意された大部屋に連れていってくれた。

そこには子供達に手を洗わせようと待ち構え、捕まえる保育士さん達とそれ乗り越え、食卓につこうとする子供達という図があつた。

その様子にやや引きつつも、2人で素直に手を洗って席に着く。他にも席についている子はいるのだが、手を洗っていないと洗いに強制退場である。

漸く全員が席に着いた頃には保育士の皆さんはグロッキー状態、ご愁傷様である。

『いただきます!!』 全員での掛け声でやっとな食事が始まった。

思えば、この環境にも慣れたものだ。

転生してもう5年近くなる。

始めは混乱していた『自分』も今は違和感無く快適に過ごしている。

こちらに来てから今まで経験した事のない事も多く、戸惑っていたのも今では懐かしい。

かといって、当初の目標である『自分』についての調査を諦めた訳ではない。

何時かはこの摩訶不思議な現象を解明したいと思っている。

しかし、それもこの年齢では然したることも出来やしない。

今はまだ早すぎる。

なに、大学のレポートじゃないんだ、締め切りも無い。

気長にゆっくりとしていこう。

先ずは、腹も満たした事だしお昼寝でもしようか。

この位の年齢では時間が経つのが早く感じるのか。

保育園も今日が最後の日だ。

もう卒園式も終わり、後は友達同士で遊ぶか、帰るかという時になって、私達は保育士さん達のいる事務室前の廊下で待機していた。人によっては保育士さんと会うのは最後になるこの日、こんな時位お礼を言いたいと誰彼ともなく言い出し、それを私を始め有志一同（という名の下っ端）の元に実行に漕ぎつけた。

静かに中を伺うと、しっかり職員全員が揃っていた……どうにも待ち構えている様に思えるが、気にしないでいこう。

『先生、今までありがとう!!』

ドアを開け、持っていた花束と菓子折を掲げながら今日卒園の17人全員で声を上げる。

……その中でも後ろの方で菓子折の箱（一辺1mはある）を掲げている自分は半ば以上はこの影にいるのだが。

「まあまあ、こんなにたくさんのプレゼント！ 皆さんどうもねえ、大変だったでしょ。」

この中で一番年長の園長が喜色満面といった様子でお礼を言って、一際大きな花束を受け取り、笑みを浮かべる。

他の職員の方達にも花束が行き渡り、菓子の箱を机に置いてお礼の言葉を受ける。

「奮発したねー、大丈夫だったの？」

保育士の中でも一番若い人（22歳、未婚、恋人募集中）が私に声をかけてくる。

この人はどうも私が年齢不相応に賢い事にある程度気付いているらしく、こうやってチョクチョク声を掛けてくるのだ。

「そうでもないです。近所に洋菓子屋がある子がいて、サービスで割引して貰ったんです。」

と言っても、精々一割引位であるが、地元では結構有名な店らし

く、宣伝としてチラシも紛れ込ませていたから職員の方々も喜んでリピーターになってくれることだろう。

「いやー、君とも今日までとはねー。何か感慨深いよ。」

「小学校は全員地元ですから、縁があつたらまた会えますよ。」

「その時はお茶でも奢ってあげるよ。」

そうやって当たり障りのない会話をしていく内に、挨拶が終わったのか、皆が帰り始めて行く。

退室して、全員が何かをやり遂げた達成感と連帯感を噛み締めていると、不意に保育園初日の事が思い浮かび、無性にこの場で遊びたくなった。

「ねえ皆、最後に思いっきり遊ぼうよ！」

提案した途端に賛成の声と挙手が多数。

既に保護者が来ている子もいるのだが、大人達は大人達でお喋りしていて気付いていないし、こっちに気付いている人も空気を讀んでか声を掛けてこなかった。

「じゃあ、ジャンケンから！」

『最初はグー、ジャンケンポン！！』

「面白かったなあ…。」

子供特有の全身全霊での遊びとなれば、如何に（肉体的）同年代の平均より優れているようにも疲れる。

しかも入園当時と違って全員がコツを覚えているので中々やり辛い。

まあ、最後にしては上々の思い出と言えた。

別に友達の誰かと別れる訳ではない。

それでもこの時、この場所で、この状態で遊ぶのは一度しかできない。

それは一度死んで、生まれ変わってしまった自分であろうと変わりなく、だから尚更貴重に思える。

その日その日を胸に刻んで、無為に年を取るのではなく、しっかりと生きていく。

かつて『自分』には出来なかったそれを、今度は『僕』が果たすのだ。

祭の残滓を胸にして、私は待っていた母の元に急ぐのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1108j/>

もう一回 2

2010年10月10日00時06分発行